筑波大学　地域研究27：113-123，2006　　Area Studies Tsukuba 27：113-123，2006

近世韻学における呉音漢音の分類と韻鏡

―徂徠と文雄―

Classification of Sino-Japanese in the Japanese Phonology of the Early Modern Period

湯　沢　質　幸
Yuzawa Tadayuki

There is no difference betweeen Ogyū Sorai（荻生徂徠）and Monnō（文雄）in the classification of Go-on（呉音）and Kan-on（漢音）. But we can find no relation between two scholars in the phonology of Sino-Japanese. So we conclude they got the same conclusion of the classification independently.

1　はじめに

古文辞学派の祖，荻生徂徠（1666-1728）は，1724（享保９）年に『韻概』を著した。韻学書であるこの書の一部において彼は，呉音漢音における清濁と『韻鏡』清濁三十六字母との対応関係を示した。これは内容的に近世中期以降の韻学に最も大きな影響を与えた，浄土僧の韻学者文雄（1700-63）著1744（延享１）年刊『磨光韻鏡』におけるそれと，完全に一致している。管見において近世，文雄以前にそのような対応関係を示した韻学者はいない。ここに，おのずから文雄は徂徠によっているのでないかという見方が生まれてくる。

いったいそのようなとらえ方は成立するのだろうか。また，もし否だとしたら両者の関係をどのようにとらえたらよいのだろうか。そこで，本稿では，まず二人が一致していることを確認した上で，この問題について一方では対応関係以外の面における二人の比較を通して，また他方では徂徠の高弟であり文雄の唐音及び韻学の師でもある儒学者太宰春台（1680-1747）と二人との比較を通して考えていってみたい。

※引用文：漢字は現行の書体を用いる。漢文については，先人が読み下したものか，私に読み下したものを掲げる。後者の場合，合符や声点等は省略する。濁点や送り仮名等は原則として原文によるが，私に適宜変えた所もある。漢文以外の引用もこれに準じる。なお，引用文中の（）内は原文本文左側の注であり，《》内は本稿の筆者が補ったものである。

※版本の場合，主たる資料についてのみその所蔵者を示すにとどめたが，すべて初版本を用いた。

2　徂徠と文雄－清濁関係－

2－1　徂徠

『韻概』は版行されることがなかった。そのためであろうか，後の書にこの書の名前が現れているという報告を聞かない。この書は，前半八条，後半十条，そして，付録ともいうべき韻鏡論からなるが，その『韻鏡』論の最後すなわちこの書の末尾に呉音漢音における清濁と『韻鏡』清濁（字母）との対応関係（以下，対応関係と言う）が，模式図で示されている［注１］。

a「字母和読漢呉清濁図」

漢音呉音清　　＝見端知幫非精・渓透微滂敷清・心・照・穿・審・影・暁・喩・来

漢音呉音濁　　＝疑

漢音清　呉音濁＝群定澄並奉・従牀・邪禅・匣

漢音濁　呉音清＝泥孃明微・日

此れ正に漢（かん）・呉（ご）二音の要領なり。読者，注意せよ。

※戸川芳郎・神田信夫著1974年刊『荻生徂徠全集第二巻』（みすず書房）による。読み下し文も戸川による。底本は関西大学図書館泊園文庫蔵本。以下同じ。なお，印刷の便宜を図って，若干私に手を加えた［注２］。

呉音漢音の清濁に対応する『韻鏡』三十六字母が端的な形で示されている。ただし，具体例はいっさい挙げられていない。ちなみに，この書の冒頭で『韻鏡』は中国で作られた「神製」のものであると規定され，そして，前半第六条や八条などではその名が示された上，実際に用いられてもいる［注３］。

2－2　文雄

文雄は，1744年刊の『磨光韻鏡』（以下『磨光』）を皮切りに，1752（宝暦２）年刊『三音正譌』や，没後の1773（安永2）年に刊行された『韻鏡指要録』などで，対応関係について繰り返し述べている。彼の説は早く最初の書『磨光』で明快に示されているので，本稿では主としてこの書によりながら彼の説を見ていくことにする。

b　漢音ハ清次清及ビ濁ノ三音ハ皆清音ヲ以ツテ呼ブ。清濁音ノ中ノ喩来二母ヲ除ク外ハ皆濁音ヲ以テ呼ブ。濁音ニ属スベシト雖モ今ノ如キハ清音ヲ以ツテ呼ブ。是レ変例ナリ。（割注：喩来素（モト）半濁音ナリ。今俗ニ呼ビテ清ト云フ）『磨光』下13ウ

※国会図書館亀田文庫蔵本。以下同。

もちろん呉音についても，この直後で同様の説明を加えている。彼の説をまとめると次のようになる。

b	漢音	清・次清・濁	清
		清濁　喩来	清
		喩来以外	濁
	呉音	濁・清濁疑	濁
		清・次清・疑以外の清濁	清

整理の仕方こそ若干異なるものの，ここに示されている対応関係はまさに『韻概』のそれと同じである。もちろん，『磨光』韻図上や『三音正譌』などで示されている対応関係も，完全に一致している。

2－3　徂徠と文雄

両者の説の一致から，必然的に〈文雄は徂徠を引き継いだのでないか〉という意見が浮上してくる。年代的な面における両者の接点を調べてみると，徂徠は1728年，文雄28歳の時に没しているが，春台の書いた『磨光』「序」には「雄師ハ平安人ナリ。少ナクシテ関東ニ遊学ス（3ウ）」とあるので，例えば〈文雄は江戸で徂徠に直接教えを受けた〉といった可能性が考えられないわけではない。また『韻概』のような書物を通して，徂徠の影響を受けた可能性ももちろんある。しかし，いずれにしてもこれまで，韻学その他において文雄が徂徠から教えを受けていたことがあるとか，文雄には徂徠の影響が認められるなどといった指摘がなされたことはない。いな，両者に接触があったという報告すらない。ここに，両者の韻学上の関係を把握するためには，これまで見てきた呉音漢音や清濁，あるいは対応関係などに関わることがらについて，改めて『韻概』と『磨光』その他，文雄の韻学書を比べてみる必要が生まれてくる。そこで，以下本稿ではこの点について，まずは両者を比べ，そしてその後，影響の有無を考えてみることにしたい。なお，徂徠が文雄から教えを受けた可能性もあるが，両者間に韻学上何らかの関係が認められるのか否かは，両者を比較すればおのずと明白になってくるはずなので，ここでは徂徠の影響が文雄に見られるかどうかという観点からのみ検討を進め行くことにする。また，徂徠の場合参考となる書は『韻概』しかなく［注4］，しかも『韻概』において対応関係に関連する言及は限られていることから，本稿では徂徠に主点を置いて，①対応関係呈示の目的，②対応関係以外の呉音漢唐音論の二面について，検討を進めていくことにする。

［注1］『韻概』における『韻鏡』と呉音漢音との関係については，湯沢（2005）でも若干触れた。

［注2］『韻概』の写本は，現在関西大学蔵本のほか国立国会図書館蔵本が知られている。両者は丁や行などにおいて相違があるものの，朱引きの部分も含め本文自体については何ら違いは認められない。

［注3］なお，清濁については第6条に次のような言及があるが，『韻鏡』そのものの説明をしているだけなので，本稿では取り上げない。

字音に清と濁と有り。全清・次清・全濁・次濁なり。「韻鏡」には，歯音に五行あり。

［注4］徂徠の韻学書としては，ほかに宮内庁書陵部蔵本成立年未詳「物茂卿輯」『韻鏡鈔』という『韻鏡』注釈書がある。しかし，どこまでが徂徠の説なのか不明であること，対応関係の呈示はもとより，これに直接関わる言及もないことから，本稿では取り上げない。なお，この書に「呉音」「漢音」という語が現れるのは一度だけである。「悉曇直為南天如呉音為拗中天如漢音直促音也拗延音也」（原文）1オ

3　徂徠と文雄－対応関係以外－

3－1　対応関係呈示の目的

呉音漢音の清濁と『韻鏡』字母との対応関係はいったい，何を目的として掲げられたのだろうか。

3－1－1　徂徠

a図の場合，その題目「字母和読漢呉清濁図」の「和読」や末尾の「此れ正に漢呉二音の要領なり。読者，注意せよ」，また，当時一般に呉音は仏書に，漢音は儒書に使うと言われていたこと［注5］，徂徠は儒者であることなどから，この図を掲げた目的は仏書や儒書を読む人，特に後者の便宜を図るところにあったと考えられる。

3－1－2　文雄

文雄は，清濁に関して上記bのような対応関係を示した後，次のように述べる。

c　《反切の》）上ノ字母及ビ属スル所ノ字ノ《『韻鏡』における》清ト濁トニ従ヒテ，厳乎トシテ之ヲ守ルベシ。是レ二音《呉音漢音》ヲ学ブノ大較ナリ。若シ或イハ清ヲ以ツテ濁トセリ，濁ヲ以ツテ清トスルハ，訛音ナルノミ。当ニ反切ノ上字ニ検シテ以ツテ是ヲ改ムベシ。

ここには『韻鏡』の規矩にのっとり反切上字を解釈して，呉音漢音の清濁を決めるべきであるという彼の姿勢が示されているだけである。ちなみに彼はこのほか，『磨光』上「緒言」や下「索隠」あるいは『三音正譌』下「凡例」等で同様の趣旨のことを述べている。

3－1－3　徂徠と文雄

文雄の言及cを見る限り，彼はただ韻学者としての立場からbのような対応関係を示しているだけのように見える。しかし，もとより文雄は古来字音にこの上なくこだわってきた仏家に属する。したがって，彼の韻学が仏典読誦に関わっていなかったはずなどないし，そして実際そうであったとしか考えられない［注6］。一方，当時の教養ある人物として彼が儒学を全然学んでいなかったわけがない。そもそも，彼の唐音の師でありまた韻学の師でもあった春台は，既に当時名高い儒学者であった。このような文雄個人の事情や，近世には周知のように仏家や儒家などにおいて呉音漢音の詮索がやかましかったことなどを重ね合わせると，文雄が対応関係を呈示しまたそれに沿って呉音漢音を各漢字に与えたことは，少なくとも副次的，間接的には「和読」の便宜のために行われたと言わざるをえなくなる。すなわち，その呈示の意図において文雄には徂徠に部分的にせよ共通する所があったと考えられる。しかしながら，文雄における呈示第一の目的は，やはり韻学上の成果を示すことにあったと言うべきである。なぜなら，彼は『磨光』などにおいて，「和読」には縁もゆかりもない唐音を常に第一にしかも全面的に取りいれ，そして，それを中心にすえた議論を行っているからである。加えて，管見の限りでは，例えばcからもいくらかはうかがわれるように，少なくとも彼が彼の韻学書の中で自分の研究成果を「和読」に取りいれるよう，積極的に働きかけている所も見いだせないからである。

これまでの検討をまとめると，徂徠は儒学の先学として後進のためにa図を呈示しているのに対して，文雄は少なくとも基本的には自身の韻学の成果としてbを示しているだけであるということなる。

3－2　呉音漢音唐音論―その由来・評価等―

近世の仏家や儒家の間では，呉音漢音そして唐音それぞれの由来や評価，そして，それぞれの系統における個々の音の正否などがしばしば話題にされていた。本稿の筆者（2005）は先に近世中期韻学におけるその由来や評価などについて若干述べたことがあるので，ここではそれを踏まえながら徂徠と文雄がこの点に関していかなる間柄にあるのかを比べてみたい。

3－2－1　徂徠

徂徠は，『韻概』前半の第一条で次のように述べている。

d　音には，漢・呉有り。漢音なる者は，漢儒の唱ふる所，其の音の最も正しきものなり。「韻会」に之を雅音と謂へり。呉音なる者は，呉人の沈［約］・顧［野王］の呼する所，唯だ牙音の次濁のみ之を有す（訓読者注「誤脱アラン」）。此れ風土の致す所にして，之を如何ともする莫き已なり卒。

牙音の次濁は，自ら唇・喉の次濁に同じ。呉人は喉音の全清を以つて之を呼す。其の説は「韻会」に見ゆ。其他の土音・郷語は，呶呶として古へを失し，後世の杭州・漳州・福州の諸音は，皆な其の古へを失す。鹵莽杜撰，鹵及するに足らず。学者，信従すること勿れ焉。

冒頭で「音には，漢・呉有り」と述べ，呉音漢音をひとまめにして論じている。ここには唐音という言葉は現れていないが，周知のように徂徠は熱烈な儒書唐音音読論者であった。また，「後世の杭州・漳州・福州の諸音」とは，たとえそれがその当時における中国音としての唐音だけを指すものでなかったとしても，それをも含む彼における唐音の方言音を言うものであったとしか考えられない。このようなことを重ね合わせると，彼もまた当時の仏家や他の儒者あるいは韻学者などと同様，日本には呉音漢音唐音三種の音があるとし，そしてその内の呉音と漢音は一つのグループにまとめられるとしていたと認められる。

ところで，当時にあって実質的には近世当時に渡来してきた中国音である唐音はともかくとして，古くから伝えられてきていた呉音漢音について彼はその由来をどうとらえ，またどのように評価していたのだろうか。dによると，彼は両者とも中国呉音漢音に発する，すなわち，中国に既に呉音漢音というそれぞれ一群の音があり，それがそのまま日本に渡来し日本の呉音漢音となったと，そして，漢音はもともと「漢儒」つまり中国の儒学が用いていたもので，もっとも正しい中国音であるとしていたことが知られる。呉音については明快な評価を示していないが，漢音を「最も正し」いものとした上で呉音を取り上げていること，不正な音と言っているわけではないことなどから，若干方言音がまじっていて必ずしもすべてが正音ではないけれども，これもまた総じて言えば正音と見ていたのでないかと解せられる。なお，漢音呉音を正とした上で，「其他の土音・郷語や，その当時の唐音である，あるいは少なくともその当時の唐音をその内に含む「後世の杭州・漳州・福州の諸音」を不正の音としているが，このような中国方言音を視野に入れた唐音論は彼以前には見られない。

3－2－2　文雄

文雄は，日本には当時呉漢唐の三音があることを前提として，この三音について種々様々な観点から種々様々な議論を行っている。徂徠との関係を明らかにするという目的に沿い，ここではdに

関わる所に論点を絞って彼の説を見ていくことにする。

文雄における呉漢唐三音の由来や評価などは，次の一文に端的に示されている。

e　凡字音ヲ呼ブコト，華夷ノ諸邦同ジカラズ。本邦古今伝習ノ音漢呉二音ナリ。漢音ハ儒家ノ用フル所トス。呉音ハ仏家ノ用フル所トス。窃ニ按ズルニ，二音昔日華人ノ伝フル所ニシテ四声正シク五音分ツナルベシト雖モ，今ニ於キテハ展転訛ヲ成シ，四声淆乱シ，七音乖舛ス。・・・之ヲ韻鏡ニ鑑ミレバ則チ正律ニ協ハズ。訛転自ラ見ユ。渾然タル国音ナリ。故ニ二音共ニ和音ト称ス。近世中華ノ正音ヲ伝習ス。当ニ華音ト称スベシ。俗ニ唐音ト称謂スルハ，其ノ音ナリ。『磨光』下６ウ

彼は呉音漢音と唐音のグループに分け，〈呉音と漢音は，古く渡来した中国音が完全に「訛転」すなわち日本化したものである，したがって，和音と呼ぶのがよい，一方，新来の唐音は中国の正音であり，華音と呼ぶにふさわしいものである〉とする。ここには三音の評価が明快に示されている。しかし，由来については特に何も述べていない。そこで，『磨光』以外の書に和音の由来に関する言及を求めてみると，複数の書のいろいろな箇所において細部にわたる説明が見いだされる。どの書においてもその言及の骨子は変わらないが，ここでは主として『磨光』のいわば各論編とも言うべき1752年（宝暦２）刊『三音正譌』の「呉音」「漢音」「華音」を参照していく。ただし，『三音正譌』は，それ以前の書には見られないくらい詳しく，呉音漢音そして華音（唐音）の由来や評価また性格などについて先行説を批判しつつ論じているので，そのすべてを紹介することはできない。そこで，以下，本稿に深く関わる所だけを摘記するにとどめる。

３－２－２－１　呉音

f　断ジテ曰フ。呉音ヤハ，本邦読書ノ旧音ナリ。今仏氏用ユル所ノ音，是ナリ。日本紀ニ，応神帝ノ十六年百済ノ王仁我ニ来リ，書ヲ読ムコトヲ皇子菟道稚郎子（ウヂノワカイラコ）ニ誨ユト云フ。其ノ音蓋シ呉音ナリ。上２ウ

※筑波大学付属図書館蔵本。以下同。

g　夫レ呉音ハ原（モト）支那江左ノ音，顧野王沈約之ニ拠ル。竊フニ之ヲ我ガ呉音ニ校スレバ，則大同ニシテ小差ナリ。上３ウ

h　又或ガ曰フ。日本ハ呉国ニ近キガ故ニ，呉音ヲ須（モチ）ユト。按ズルニ此説是ナリ。・・・百済モ亦呉ニ隣ル。王仁呉音ヲ用ユル所以ナリ。上４オ

i　呉人ノ言語鄙倍ナリ。故ニ呉音ノ譏有リ。上７オ

文雄は，〈日本へは百済の王仁が呉音を持ってきた。日本は呉国に地理的に近い。そのため，古くから呉音を用いてきた。百済も日本と同様である。だから，王仁などが日本に持ってきた音もまた呉音なのである。なお，「江左」の音＝呉音は卑しい方言音と譏られることもある〉としている。

３－２－２－２　漢音

j　或ガ曰フ。呉音ハ荊蛮辺裔ノ音，漢音ハ中華帝都ノ音ナリト。断ジテ曰フ。未可ナリ。中華ノ漢音トハ謂ク華音ナリ。我ガ漢音ハ中華歴朝帝京ノ音ニ非ズ。却リテ，是辺裔ノ音ナリ。上５ウ

k　漢音ハ今ノ儒家ニ伝フル音是ナリ。其ノ始メ桓武朝ニ草創ス。・・・或ガ曰フ。延暦十七年詔

シテ漢音ヲ用ヰテ五経ヲ読マシム。明経ノ徒，之ニ従ヒテ十三経ヲ読ム。詩文雑書ノ如キハ，呉漢雑ヘ用ユ。仏書ハ旧ニ仍リテ呉音ヲ以ツテ読ムト。按ズルニ，延暦ノ間遣唐使往来頻頻ナリ。而シテ漢音彼コヨリ伝ヘ来タル。当時四声守リテ乱レズ。今ト逕庭ス。然リト雖モ唐京ノ正音ナルニアラズ。正音ハ自ラ唐音ノ在ルニ有リ。今ノ漢音ハ唐宋ニ於イテ其ノ名ヲ経見スルコトナシ。計ルニ辺地ノ方音ニシテ亦呉音ニ同ジ。唐ノ朝廷雑ヘ行フノ音ナリ。我ガ国以ツテ唐京ノ雅音トス。上８ウ

文雄は，〈漢音が日本に渡来してきたのは桓武朝の時である。日本で漢音と呼んでいる音はもともとは唐代「辺裔」の音である。すなわち正音でない〉とする。

ちなみに，彼が古来の正音としている唐音については先に，『磨光』下において声母に当時の中国音としての唐音（華音）の一種，杭州音が加点されていることを紹介したが，『三音正譌』で彼は杭州音こそまさに正音中の正音であるとしている。呉音漢音論ではないけれども，徂徠説にも関わるものなのでその説をここで紹介しておく。

1　華音ハ俗ノ所謂ル唐音ナリ。其ノ音多品ニシテ今長崎舌人家ニ学ブ所ニ，官話杭州福州漳州ノ同ジカラザル有リ。彼ノ邦輿地ハ広大ナリ。四方中国音斉シカラズ。中原ヲ正音トス。亦之ヲ雅音ト謂フ。四辺ヲ俗音トス。亦之ヲ郷音ト謂フ。・・・其ノ中原ニ用ユル所ノ音，二類有リ。官話ト俗話トナリ。・・・官話トハ読書ノ音ニ此ヲ用ユ。其ノ官話ニ亦二アリ。・・・二種通ジテ中原雅音ト称ス。支那人以ツテ正音トス。其ノ俗話トハ杭州音ナリ。亦ハ浙江音ト曰フ。予按ズルニ，中原雅音ナル者ノ正シカラズトス。何ンヤ唐宋正律ノ韻書ニ牴牾スレバナリ。・・・其レ浙江音ヤ，予ヲ以ツテ之ヲ観レバ，嗷如トシテ正音ナル哉。唐宋正律ノ韻書ニ符合スルヲ以ツテナリ。上10ウ

３－２－３　徂徠と文雄

前項での考察を合わせると，呉音漢音の由来や呉漢唐三音の評価などについて徂徠と文雄の間には共通点と相違点のあることが分かる。

共通点としては，まず，呉音漢音の使用場所について両者は一致しているということがある。ちなみに，ｄでは「漢儒」は漢音使用ということしか言っていないけれども，当時の漢字音に関わる常識にかんがみると，これは仏家は呉音使用ということをも含意しているものとしか考えられない。次に，当時の中国音としての唐音を取りいれた議論をしていること，また，呉音漢音を一まとめにし唐音と分けていることなども両者共通である。さらに，呉音の源は中国呉地方の音にあるとすることも一致している。

一方，相違点としては，まず，三音の由来についての理解が異なる。徂徠は中国に呉地方音として呉音，正音として漢音というものがあり，それがそのまま日本の呉音漢音になったとしているだけである。これに対して，文雄は神代に渡来した中国呉地方音の日本化したものが呉音であり，また，桓武期に渡来した中国音の日本化したものが漢音であるとしている。すなわち，徂徠は中国原音と日本呉音漢音との距離を零か僅少としているのに対して，文雄は両者の間には相当な隔たりがあると見，日本の呉音漢音はもはや「和音」と呼ぶべきものであるとしている。また，徂徠が少なくとも漢音について〈中国儒者が使っていた漢音が日本儒者にそのまま引き継がれた〉としている

点も，文雄とは異なっていると言えよう。なぜなら，みずから中国辺土の不正な音と認定する漢音が，中国の歴代王朝で思想的に重要な役割を果たしてきた儒学において用いられた〉などという説を，文雄が立てるはずがないと考えられるからである。

次に，三音の評価を見てみると，徂徠は中国漢音の原音は正音・雅音とするのに対して，文雄は漢音の原音は不正な音としている。呉音の場合は，先述のように徂徠は明言こそしていないものの，若干方言音を含みながらも（ほぼ）正音としていると認められるのに対して，文雄はもちろんその中国原音は不正としている。ちなみに，唐音について，徂徠はその内の杭州音などを訛音として排斥しているのに対して，文雄は唐音なかんずく杭州音を正音としている点も大きく異なっている。

なお，由来や評価について，徂徠は『古今韻会挙要』など中国の書物によっているのに対して，文雄は由来はもとより特に評価においてはみずからの立てた韻学的な立場を強く打ち出している点も異なる。[注７]

３－２－４　徂徠と文雄の間柄

対応関係以外の面における両者の共通点にあって，まず，呉音漢音使用の場の違いは漢字音についていくらかでも学んだ者ならだれでも知っていることばかり，つまり当時の常識だったと言ってよい。なぜなら，周知のように，そっくり同じような言及が中世以降の抄物や韻学書あるいは随筆その他にまさに頻繁に見いだされるからである。また，唐音の取り入れも同様である。すなわち，それが漢字音の一種であることからして，漢字音に少しでも関心があり，かつ唐音を少しでも学んだことがある者ならだれしも，その深浅や多少はともかくとして自身の漢字音論の中で必ずやそれに言及するに違いないからである。事実，その痕跡もこれまた中世以降の書に頻繁に見いだされる［注８］。

以上，使用の場と唐音に関する両者の共通点は，二人に特有の結びつきがあったことを示す証左などとは到底言えそうにない。

では，相違点はどうか。説明を加えるまでもなく，由来についても評価についても両者間の相違は両者の呉音漢音論が根本的に異なっていたことを示している。また，唐音においても，杭州音の評価が逆であることは，二人の隔たりが大きいことをはっきりと示している。

これまでの検討をまとめると，共通点は当時における韻学的な常識であり，相違点は両者の韻学の根本に関わるものであること，これは両者の間には韻学的に大きな溝があったこと物語るものにほかならない。

［注５］例えば，1705年刊『韻鏡諸鈔大成』四17ウ「呉音漢音意得之事」，1715年刊『韻鏡袖中秘伝鈔』七五「呉音漢音ノ事」，『倭読要領』上「倭音ノ説」，『磨光』下６ウ等。

［注６］例えば法慧元聡の『磨光』「題磨光韻鏡後」や『磨光』（勉誠社文庫）の「解説（林史典）」等。

［注７］徂徠の唐音直読の主張が明確に打ち出されている1711年序『訳文筌蹄』においても，徂徠は音そのものにおいて唐音を呉音漢音の上位に置いているわけではない。（湯沢（2000））

［注８］唐音取りいれの実際例は，よく知られているように17世紀以降の韻学書には頻繁に見られることである。また，さかのぼっては中世の漢字音論においても，しばしば見いだされる。例えば，ロドリゲス著『日本大文典』（土井忠生訳1955，三省堂667頁），湯沢（1986）三，李承英（2002「室町時代における呉音と漢音」『日本学報』（韓国）53など参照。

4　徂徠・文雄と春台

当時における一般常識における共通点は，もちろん文雄が徂徠の教えを受けた証左とはなりえない。しかし，一方，呈示の目的を初めとして両者間の，対応関係以外の面における溝もまた，対応関係そのものに関して文雄が徂徠の教えを直接受けた可能性を完全に否定する証左ともなりえない。とはいえ，その可能性の低さを暗示するものとはなっている。ここで問題となるのは，間接的な授受の可能性があるのか否かである。いったい，韻学に関して徂徠と文雄との間にいかなる人物がいたのだろうか，それともいなかったのだろうか。この問いについてもこれまで論じられたことがないが，いずれにしてもここに至っては，何はともあれ，先にその名を挙げた太宰春台を取り上げないわけにはいかない。なぜなら，そこで紹介したように彼は親しく徂徠から儒学を学ぶ一方，文雄に唐音と韻学を教授した人物だからである。彼が両者のいわば橋渡しをしていたのかどうか，一度は確かめてみなければならない。

4－1　春台の呉音漢音論

春台には韻学書と呼ぶべきものはない。しかし，1727（享保13）年刊の『倭読要領』には，彼の韻学的な見方や知識などをうかがわせる言及がかなり多く見いだされる。それ以外の書からそれ以上を知ることはほとんど期待できないので，以下本稿ではこの書に基づいて春台を見ていくことにする。また，彼については既に述べたことがあるので（湯沢（2005）），詳細はそれにゆだねる場合もあることをあらかじめことわっておきたい。

春台について我々の最大の関心事は，もちろん対応関係に関する言及の有無，またあったとしたらその内容である。しかし，残念ながら直接対応関係に関して述べた所はない。そこで，3節と同様，呉音漢音さらには唐音の由来や評価などに目を転じてみると，彼はおおよそ，次のようなことを述べている。

> 呉音漢音の源はよく分からない。しかし，両音ともに中国の正音だったと考えられる。すなわち，古く呉地は辺地であり，呉音もまた不正な音であった。しかし，その後栄えて六朝ごろには「君子ノ郷（キヤウ）」となり，音も正しくなった。日本に渡来した呉音は，六朝もしくは唐初のその正しい音である。漢音は，漢代以降の中心都市，長安・洛陽の正音をその源としている。ただし，両音は日本渡来後ともに日本化し「訛舛」の音となってしまった。だから，倭音と呼ぶのがふさわしい。（上「倭音説」）

4－2　春台と徂徠・文雄

管見では，上記の春台の説は，その由来についての言及も含め，もともとの呉音漢音は双方ともに正音と明言している点や倭音を設定している点などにおいて，その当時における新説と認められる。すなわち，漢音は正音としている所など，部分的表面的には一致している所がないわけではないけれども，徂徠とは根本的な点においてかみ合っていない。例えば，この，漢音を正音とすることについても，徂徠はただ単に『古今韻会挙要』にのっとってそのように認定しているだけなのに

対して，春台は独自の根拠を持ち出しているのである。いずれにしても，呉音漢音を倭音と呼んでいること，徂徠が若干方言音が混じっているとする呉音を当初から全面的に正音と認めていることなど，徂徠に反する所は見いだせても，彼を受け継いでいると明言できる所は一つとして指摘できない。ちなみに，先述のように徂徠はその当時の中国音である唐音を用いて呉音漢音の正否などを論じていないが，春台は，中国呉音の内の南京音は明代以降「天下ノ正音（上６ウ）」になっていたとした上で，それでもって日本の呉音漢音を測ってみると両音ともに中国音とは似てもにつかないものになっていることが判明すると述べている（上８オ）。[注９]

これまでの考察は，徂徠春台間の齟齬は，対応関係について春台が徂徠から文雄への橋渡しをした可能性が認められないことを示している。そして，さらに次のような言及を見ると，〈春台はそもそも読誦や読書のために，正音たりえない倭音について，呉音漢音の別と関わらせながらその当否やそれに関わる清濁などを論じるつもりは全然なかったのでないか〉と，すなわちこの推測は妥当と考えざるをえなくなる。

m　儒書ニハ漢音ヲ用ヒ，仏書ニハ呉音ヲ用ヒ，其余ノ書ハ，呉漢兼用テ読ムコト，古来ノ相伝ナレバ，是ニ従フベキコト勿論ナリ。然レドモ二音倶ニ中華ノ正音ニアラザレバ，混用ストモ何ノ不可ナルコトカアラン。必シモ是ニ拘泥（カヽハリナヅム）スベカラズ。上「倭音正誤」（月瀬文庫蔵本）16ウ

[注９] なお，春台の日本呉音漢音倭音説は文雄の和音説の源となっているが，文雄は両音の中国原音自体が既に不正であったとする点において春台とは正反対である（湯沢2005）。また，唐音においては春台の南京音正音説に対して，文雄は杭州音が最高の正音であると唱えているわけである。

5　対応関係の発見（発明）

これまで対応関係について徂徠説の文雄への継承の有無を追ってきたが，春台にまで範囲を広げてみても，両者間には否定的な傍証こそあれ，肯定的な言及は何も見いだせなかった。ちなみに，調査した限りでは，その他，徂徠から文雄に至るまでの間の近世『韻鏡』研究書においてもこれは同じである。前述のように，傍証がないことは文雄が徂徠の対応関係を引いていないということの確たる証拠とはなりえない。しかし，少なくともその可能性を高めるものとはなりうる。そこで，いま文雄は徂徠を受けなかったという立場に立ってみると，ここに，文雄はどのようにして対応関係を見いだせたのか，打ち出せたのか，という疑問がおのずと生じてくる。もちろん，この疑問はそっくりそのまま実は徂徠についても当てはまるものである。さらに言えば，彼らに先立つ第三者がいたとしても，また同様である。いったいどのような基盤に立って，どのような経路を経て徂徠は対応関係を導くことができたのだろうか，対応関係を打ち立てることができたのだろうか。この問いに対しては近世さらにはさかのぼって中世において，『韻鏡』は呉音漢音論にどのように関わっていたのか，また，呉音漢音と清濁はどのような関係にあるとされていたのかを明らかにしなければならない。残念ながら本稿の筆者にはまだその準備がととのっていないので，この問題について

はいずれ稿を改めて考えてみることにして，本稿を終えたい。

[参考文献]

岡井慎吾　1934『日本漢字学史』明治書院

1935『柿堂存稿』有七絶堂

杉本つとむ　1998『杉本つとむ著作選集三日本語研究の歴史』八坂書房

馬淵和夫　1963『日本韻学史の研究』Ⅱ日本学術振興会

1970『韻鏡校本と広韻索引新訂版』巌南堂

満田新造　1964『中国音韻史論考』武蔵野書院

湯沢質幸　1986『唐音の研究』勉誠社

2000「近世韻学における唐音－荻生徂徠を中心として－」(『国語論究』8　明治書院)

2004「近世韻学における呉音漢音の分類－韻鏡易解から磨光韻鏡へ－」『訓点語と訓点資料』113

2005「近世中期韻学における春台」『日本文化研究』16